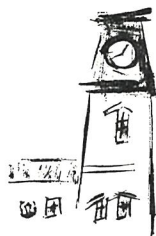


彰栄館の時計と鐘



加藤 延雄

彰栄館は同志社最初の煉瓦造校舎として明治十七年（一八八四年）九月に竣工した。今では京都最古の煉瓦建築物であって、齢まさに八十三歳である。彰栄館のシンボルはなんと言ってもその時計塔とその時計や鐘である。クロック・タワーはもちろん彰栄館の頭部として明治十七年に建設されたのであるが時計がついたのは満三年後の明治二十年（一八八七年）九月であった。市内の時計店から優秀な時計技師二人が招かれたが、事実上、

時計の組み立、据付け工事の主役は新島先生の片腕であるデビス先生であったと言わなければならない。デビス先生が組立ての説明書

もなく、ああでもない、こうでもないと言ひ苦み惨胆して、組立てて行くのを二人の時計技師はただ見学するのみに終ったと言ふことである。時計据付けに関するデビス先生自身の記録がある。デビス先生の長男J・M・デビス著『デビス——軍人宣教師』（デビス先生伝）の一節（二九五頁）である。

「一八八七年の夏休みの最中に彼は山のキャンプから下山した。彰栄館用のアメリカ製時計が到着したので、その据付工事を監督するためであった。『この時計は打鐘重錘のみで三〇〇ポンドもある大きなものであった。市内の最良の時計技師二人と一緒に荷を解いた。はらばらに分解されていて、説明書もついていない。駆動部を組立てようと日没まで働いた。それ以来私は時計を組立てようと働き続けた。打鐘重錘のため

に一連の複滑車で一〇〇呎の落差を引かなければならなかった。私は滑車を地上五〇呎の塔上に据え、時計の機械を二階に、鐘を三階に、そして針と文字盤を四階に据えた。そして元来この塔用に設計されていなかった時計に適するように連桿を設計しなければならなくなった。素人が組立てたのだから、これがうまく作動するかどうかは、やってみなければわからない。私は、これをするに於いて当局に抗議したが、どうしても私を放免してくれない。九月四日水曜更に一日、全日十三時間、時計にかかり切りだった。針、重錘、打鐘レバーの取り付けを除けばすべてができあがった。九月十八日、時計は正常に動いている。私は自分の書齋から大変明瞭に時鐘が時刻を報じているのを聞くことができる。』

右の文中『……』の部分はおそらくデビス先生の日記からとったものであろう。これで彰栄の時計と鐘が据え付けられたのは一八八七年九月十八日であったことがわかる。

時計はその機械についているパネルによると米国コンネチカット州トマス市トマス時計会社製で、一八八七年五月五日完成であ

る。時計の機械は時計塔の二階の一隅に造られた機械室におさめられ、重錘は三階四階にワイヤーでかけられた。文字盤は現在のように白地に黒文字ではなく、濃緑地に金文字で美しく、かつ荘重であった。雪の積もった時には実に麗わしいコントラストを現わした。文字盤は塔最上階の四方にあるだけでなく機械室にも小さいのが一個ある。われらの英会話のダンニング先生は、彰栄の時計はいくつあるかと問うて、4と答えるものがあると、ノ、5だとやり返して茶目気な喜びかたをしていたのを思いだす。

*

鐘は米国ヒルズバローのC・S・ベル会社製で、直径約七〇センチで、鐘に沿って湾曲し両支点を結ぶ線が鐘の重心のわずかに上を通るような回転軸に固定され、かつこの軸の一端に車輪があり、この車輪に引綱がついていてこれを引くと比較的軽く鐘を振ることができる仕掛になっている。音は鐘の中心にある舌が鐘の縁の内側に当って出る。この鐘はまた時計の機械仕掛によって作動するレバーで一時間ごとにその時刻に相当する回数だけたたかれるようになっていた。(この場合は

振り動かされず静止しているが、レバーの先のハンマーが鐘の縁の外側をたたく) 人力で鐘を鳴らすのは学生のアルバイトで授業料が免除された。これは今日も実行されている。この鐘撞によりずいぶん多数の学生が助けられてきた。鐘撞をやった人々のこの彰栄の鐘に対する感懐はまたひとしお深いものであろう。

鐘音はずいぶん遠くまで聞えた。北白川、上賀茂、京都駅のあたりに聞いてさえ聞えることがあったという。当時、同志社学生はその大半が寄宿生であったので礼

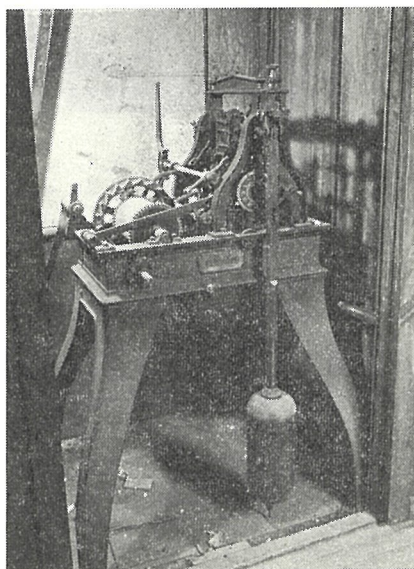
拝(七時半)授業(八時より十五時まで、各時十分前に鐘がなる)のみでなく起床(六時)食事(夕七時)門限(八時半)自習終(二十一時半)祈禱会(金曜十八時)日曜礼拝(十時)等は鐘で知らされた。全同志社の活動はこの鐘声で律せられたので、この鐘声は同志社ボーイズの心の底までしみこんで生涯忘れられないものとなった。また近隣の人々にもなじみ深いものとな

った。ちようと兵士における軍隊ラッパに似ていると思う。

*

現在の鐘は第二世で、第一世はこれよりやや小さく、従って音も高かった。またさえてもいた。しかしあまり激しく撞いたためか、ひびがはいたので取替えられるようになり明治四十年九月、現在の第二世鐘の出現となった。この取りかえ作業もデビス先生に押しつけられた。もう七十歳になろうとしていた先生には相当の重労働であったと思われる。

彰栄館の時計——機械室



再び前に引用したデビス先生伝の二九六頁を見よう。

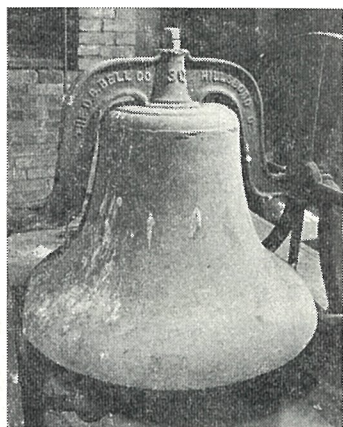
「時計塔に新しい鐘を取り付ける作業の監督のためここ数日間が多忙であった——重い鐘を塔の三階まであげて据えることはわれわれが持ち合せていた道具でもってしては決して小さい仕事ではなかった。手撞装置は容易だが、時計仕掛けの時鐘装置は大変複雑であった。新鐘は旧ハンマーを使用するには大きすぎた。そこで私はやむを得ず鉄棒をまげてベルを打つために主軸によって作動する新ハンマーを作らなければならなくなった。三日間の重労働ですべてうまく動き出した。」

とにかくデビス先生ご在世中は時計や鐘のことはすべて同先生に依存していた。

＊

鐘は引綱で今も毎朝中学の礼拝時を告げているが、時鐘の方はもう昭和時代には狂うようになり、時計もここ十年ほど前から動かなくなってしまった。

時計を動かし、時鐘をならす動力源はそれぞれの重錘であって、それはいずれも円筒形の鉄の容器に鉄片を詰めたものが径一センチ



彰栄館の鐘

位のワイヤーでさげられているが、長年の疲れのためかワイヤーが切れて重錘が三階、二階の床をぶちぬいて塔下東入口に落下して全館震撼、授業中の私達を大いに驚かせた。幸いに塔下に人なくけが人は出なかった。ただ一人の授業をサボった男が入口へ十メートルくらい近ずいた時、この落下でびっくり仰天——すわ地震——彰栄館崩壊——と血相を変えてチャペルのあたりまで走ったという事もあった。時計の老化はワイヤー切断だけでなく時鐘装置も狂いが生じ、十時には十回鳴るべきところ幾十ともなくいつまでも鳴り続けるというようなことがあった。これがもとで

同志社に何か変事が起る際こういう鳴り方をするのだというような怪談めいたことが伝えられるようになった。そしてやがて時鐘は鳴らなくなり、ついには時計も全面的に動かなくなった。

＊

ある朝チャペルの礼拝の話の中で和田琳熊先生が「相国寺の鐘は Gone と消えてゆくが彰栄の鐘は Ring と叫んでいる。これは仏教とキリスト教の性格の相違を象徴しているかのように思える」と語られたことは今も忘れられない。

彰栄の鐘と時計とは同志社学生の生活と固く結びつき、その音色は魂の中にとけこんでいる。卒業式の時によく歌われた「送別の歌」の第三節にこの歌の作者で、同志社出身である三輪源造先生は彰栄の鐘声を歌っている。

あさゆうなれし鐘の音よ

別れのふしを打つなかれ
とこよまでこころの空に
ひびき渡りて絶えせぬを
まひるもよわも汝が音に
神の召し給うみ声きかまし。

(大5大経卒・蘇峰文庫主事)

「同志社文学」と明治の翻訳文学

松村昌家



ど三年前に私が同志社へ入るよりも数年前のことであつたと思う。私の当面の問題と関係がなかったし、その頃の私は同志社とは無縁の者であつたから、別に感動もおこらなかった。

＊

『同志社文学』が同志社においてさえ完全に保存されていなかったことに、私はまず大きな疑問を感じた。私が『同志社文学』の名を最初に見たのは、岩波講座世界文学の『西洋文学翻訳年表』（木村毅・斎藤昌三共著、昭和八）においてではなかったかと思う。それから木村毅氏の『明治文学展望』（改造社昭和三）。両方とも柳田泉氏の『明治初期翻訳文学の研究』とともに、明治時代における西洋文学の翻訳を知る上において貴重な資料で、折にふれてページを開くのであるが、ここで『同志社文学』の存在を知ったのは、ちよう

一九六五年四月、私が同志社に入つたときに、たまたま私は、岡本昌夫先生が中心になつて発足した『同志社文学』の共同研究に加えてもらうことになった。そしてそのときあらためて前記二書を開いて見て、『同志社文学』が、日本における最初のイブセン紹介の栄光をもつ雑誌であることを認識したのであつた。その第六十三号と続く第六十四号、そして第六十六号（あと中断）に、イブセンの『社会の敵』が高安三郎（月郊）の翻訳によつて連載されているのである。明治二十六年のこ

とである。

高安月郊は『同志社文学』誌上にもう一つ日本の翻訳文学史上貴重な業績を残した。それは、ドストエフスキイの『損害と侮辱と』『虐げられし人々』の翻訳である。ドストエフスキイのこの作品は、内田不知庵によつても『損害』という題名で『国民之友』に訳されているが、それは月郊より少しあとの明治二十七年のことになる。『損害と侮辱と』は、英訳の『The Injured and Insulted』を訳したものであろうが、その第一回は明治二十六年五月の第六十五号に掲載され、続いて第六十六号、第六十七号と三回連載されて、あとはとぎれている。木村毅氏は『社会の敵』と『損害と侮辱と』が一つにのつた『同志社文学』第六十六号の表紙の写真を『明治文学展望』の中にかかげているが、これは『同志社文学』の存在を世に紹介した最も早い例ではなからうか。

この翻訳と同時に注意したいのは、やはり高安月郊が、『社会の敵』の第一回の発表と同時に、第六十三号で行なっているドストエフスキイの略伝およびその作家としての特質の紹介である。彼はショーペンハウエルや、

ルソーとバイロンなども相前後して紹介しているが、このドストエフスキ論が最も興味をそそる。

「ドストイエフスキの作は多くドラマなり。人と外界の衝突を写して惨憺たる運命を示す。而して其材となるものは常に貧民なり、愁人なり、侮辱せらるゝものなり、傷害せらるゝものなり、壓抑せらるゝものなり、泣て言ふ能はざるものゝ為に言ひ、苦で訴ふる能はざるものゝ為に訴う。然れどもユゴーの如く自己の意見を現はさず。而して復たゾラの如く人間の醜惡のみを描かず。社会の陥穽に落ちて、肉体は汚るも、精神は尚清きもの、氣象尚高きもの、彼の主人公に少なからず。」といったような評は、実に彼の直感力の鋭さをあらわすものといふべきであらう。

しかし、惜しむらくは、高安月郊の翻訳は両者とも『同志社文学』上においては、ついに未完のままになってしまった。その名前にもかわらず『同志社文学』は、文芸雑誌としての役目を果し得るものではなかった。文学的記事は決して少なくないし、また外部の文学的現象に対しても積極的な関心を示している。中でも磯貝雲峯は活発であつて、文学

に關するいくつかの論説のほかに、明治二十五年に出た内田不知庵の『罪と罰』の翻訳を数回にわたつて評したり、『早稲田文学』や『城南評論』など、當時活躍していた文芸雑誌の動きにたえず注意をはらつてゐる。だが多くは思想に乏しい主張に走りすぎており、自らの熱弁に酔うような未熟な論客が論を競うといったような傾向が全体に流れてゐる。従つて、文学論としての体裁をなしているものは皆無にひとしい。小説の創作は一編もない。詩は数多いが拙劣である。

＊

こういった文学的な貧弱さは、この雑誌が専門的な文芸誌を意図したものではなく、ある意味で啓蒙的な綜合雑誌として経営されたものであるから、当然免れがたいものであつた。しかもその創刊当時の明治二十年は、文学は啓蒙期を脱し得ていない時代であつた。坪内逍遙の『小説神髓』や『当世書生気質』があらわれてはいたが、まだ政治小説の時代であつた。ちなみに明治二十年における文学現象を見ると、六月に出た二葉亭四迷の『浮雲』第一編を除けば、あとはほとんどが政治小説ないしは西洋小説の政治小説的翻案につ

きるといつてよい。

この時代に、若い学徒の一群が「知識を交換し文章を練磨する」目的をもつて、時世を論じ、宗教を説き、かつ海外の文化を紹介する場としての雑誌を刊行するときの意気はまさに軒昂たるものがあつたと想像される。これは『早稲田文学』の創刊よりも四年前のことであつた。文芸の面における価値の問題はさておき、その歴史的意義は十分に評価されてよいと思う。

ただ東京において明治二十年をすぎた頃から、急激に文学運動が進んだのに反して、こちらにはそういう気運にめぐまれず、進歩がなかった。『同志社文学』が『早稲田文学』に較べて斬新活潑な文学運動の圏外におかれるのは自然の勢であつた。その当時の編集者が中央の文壇に対してどういふ姿勢を持っていたか、これは想像もつかない。ただ、明治二十六年五月の第六十五号に、尾崎紅葉の稿が期待されたが、彼の不意の事故のためにその原稿の獲得が実現しなかった、という編集者のことわり書きが見える。「何れ紅葉山人には起草を乞ふて、必ず説者諸氏に対する編者の責任を全ふすべし。」しかしこの編者の責

任が全うされた形跡はない。そして『同志社文学』は結局文壇とは無縁に終わった。

*

では、それで『同志社文学』は文学的見地から省みられる価値を失なったといふべきだろうか。この雑誌は長い間少し冷遇されすぎたと私は思う。それが生れた同志社においてその散逸を防ぐとする積極的な努力がなされたのだろうか。私は同志社の歴史的事情にうとい者として思うのであるが、全八十八号のうちの数多い散逸は、結局これに対する同志社の無関心のためにおこったことではないのだろうか。多くの執筆者や、ことに外国文学の翻訳者について具体的な知識を得ることは、ほとんど望めなくなってしまった。

『同志社文学』の共同研究が、第二十九号を除いてあとの全部を蒐集し得たということはおそまきながら幸いなことであった。以前に津崎秋男氏による『同志社文学』総目次ができたが、やがてこの共同研究が集めた新資料によって、新たな総目次と全内容の解題の刊行が用意されていることをついでに書き加える。

これはほんの一例（あるいは唯一の例かも

知れない）だが、『同志社文学』が外部で熱心に読まれた証拠がある。正宗白鳥は、少年時代にこの雑誌を熱心に読んでいた。彼は明治二十九年に十八歳で東京へのぼるのであるが、『同志社文学』はもう少しのところまで彼を同志社へ誘いよせるところであった。「本当は、私は京都の同志社へ行きたかった。当時新島襄は既に死んでいたが、私は故郷で『同志社文学』を愛読していたので、それが同志社志望を思い立たせたのであった。」（中野好夫編『現代の作家』岩波新書一八頁）

すでに言ったような『同志社文学』の文学的貧困の中で、翻訳だけはもっと高く評価されていいのではないか。翻訳の面で、前述の高安月郊だけは一応の評価を得ているが、それでも多くの場合、それはイフセンの翻訳者としてであって、たとえば、国会図書館編の『明治 大正、昭和翻訳文学目録』は、彼の『損害と侮辱と』の翻訳を見おとしている。実際に見ると、ドストエフスキイ紹介の方がおもしろい。

*

それから小説の翻訳として、翻訳史の研究や翻訳文献目録において是非とり扱ってほし

いのは、W・アーヴィングの翻訳である。明治二十一年一月、二月、そして五月の『同志社文学』第九、十、十三号に、春陽学人の翻訳による『新郎の幽霊』が連載されている。これは森鷗外の『リップ・ヴァン・ウィンクル』の翻訳『新浦島』よりも一年前である。それから第二十四号（明二十二、七）に『スケッチブック』の中の『ロンドン府の日曜日』が素軒逸史によって訳されており、さらに第三十二号から第三十四号（明二十三、四、六）までの三回にわたって、同じく『スケッチブック』の『親子の情』の翻訳が連載されている。訳者は樵耕山人とある。それからディケンズの『ボズの素描集』の中の『基督祭の宴』の翻訳（第八十四号、明二十八・一）がある

こともあげておきたい。この訳者は志川生となっている。ところで、これらの翻訳者たちはどういう人であろうか。それが全然知られていない。恐らく文学者としては無名の人次である。しかし、彼らの翻訳は明治二十年代に行なわれたほかのものと較べて、決してひけをとらないと思う。それらの翻訳が注目されずにほうむり去られるのを惜しむゆえである。

（商学部助教・英語）

石川啄木と村井知至

川 並 秀 雄



三浦重造え

四月になると、いつも心に浮ぶのは、石川啄木の悲惨な、終焉である。

ただ一人、病苦貧窮のうちに死んだ啄木の臨終にいた若山牧水は、枕もとに、僅かに箱の蓋がとられたばかりでおいてある、ヨードブルトーゼの襟を眺めて、啄木の言葉をおもいだした。

「若山君、僕はまだ助かる命を、金の無いために自ら殺すのだ。見給え、そこにある薬がこの二、三日来断えているが、この薬を買う金さえあったら、僕はいまに直ぐ元気を恢復するのだ、現に僕の家には一円二十六銭（或は単に二十六銭であったとおもつ）の金しか無い、しかも、もう何処からも入って来る見込は無くなっているのだ。」

啄木は、薬代はおろか、米代もなくなつて四月十三日、午前九時三十分には急逝したのである。

啄木は、幸徳秋水を中心とする、いわゆる大逆事件を転機として、社会学に興味をもつにいたり、ともしい財布の底をはたいて、書物を買ひ求めた。

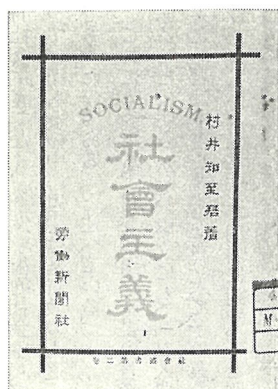
本を買ひたし、本を買ひたしと、あてつけのつもりではなけれど、妻に言ひてみる。

赤紙の表紙手擦れし
国禁の
書を行李の底にさがす日

売ることを差し止められし
本の著者に
路にて会へる秋の朝かな

啄木が窮迫のさなかに、買い集めた書物は四十年もかかつて、やっと判明したのである。啄木の晩年の社会思想を知る上に、重要な文献であるだけに、私は精魂を傾けて追跡調査した。啄木研究家吉田孤羊が不完全なリストを昭和三年八月、「愛書趣味」第三年第五号に発表以来、啄木の研究書はすべて、この誤った、でたらめのリストの孫引ばかりであった。

たとえば、石川正雄編「石川啄木研究」（昭和八年十一月、楽浪書院）渡辺順三、矢代東



明治32年7月刊行の初版



明治35年11月刊行の再版

村共著「啄木短歌評釈」(昭和十年、ナウカ社)、岩城之徳著「啄木歌集研究ノート」(昭和二十七年八月、第二書房)、岩城之徳著「石川啄木伝」(昭和三十年十一月)、岩城之徳編「定本石川啄木歌集」(昭和三十三年三月、学燈社)、吉田孤羊著「啄木短歌の背景」(昭和四十年十月、洋々社)、吉田孤羊著「石川啄木と大逆事件」(昭和四十二年六月、明治書

院)など、いずれも、われわれが典拠とするに足りない、誤ったものである。吉田孤羊が昭和四十二年度において、「何年もかかって集め出したが、微力悲しく、いまだに全部をそろえかねている始末である。」と告白しているが、「石川啄木と大逆事件」(一五八頁)結局半分の十冊位しか買い求めることができなかった」(「啄木短歌の背景」二二二頁)というのが、本音とおもわれるので、まちがっているのも無理はない。

私は近く、その全部を発表するつもりであるが、かすかずの啄木愛読書のうちに、村井知至著「社会主義」(明治三十二年七月、労働新聞社、B7判、一六四頁、定価十五銭、発売禁止処分を受けた)があったことは、村井知至はもとより、世の啄木愛好者も余り知らないことである。

しかもこの書は、当時、好評を博し、明治三十五年十一月、二版が発行されたが、これはB6判と大きくなり、八六頁になっている。第三版が、明治三十六年二月に発行されている。

表紙の装釘も、初版は表紙に Socialism と赤字で印刷し、その下に赤字で社会主義と書

いてあるが、二版は安部磯雄に似た髭をはやした一人の男が立って演説するのを、沢山の聴衆がとり巻き、その真中に長い旗が立ってその旗に赤字で、社会主義と書いたものとなり、第二版の序文を加えている。

初版も、二版も、容易に入手し難い稀覯本だけに、実物も見ないで発表するから、誤るのは当然で、それを確かめもしないで孫引きするにいたっては、無責任も甚だしい。

吉田孤羊が、昭和三年初めて、この書を紹介するにあたって、実物を見ずに、ただ山口孤剣の「日本社会主義運動史」を参考にして明治三十一年とおもい込み、山口孤剣が「著者は豊崎善之介で、豊崎は関西学院神学部卒業者で……彼が村井知至の名によって公にした……」という記述を、そのまま信じ、現在に至るまで誤認している。

村井知至が、昭和二年、警醒社書店から出版した「蛙の一生」に「私の演説や研究の結果を出版したことがあるが、多分これが日本に於て社会主義に関する最初の著述であったかと思ふ。今は元より絶版になり私の手許にさえ一冊も残っていないが、其の内容は政治

的社會主義でなく、全然學術的社會主義であつて、而もその中心思想は基督教の人道主義であつたのである」と述べている。

これによつても、村井知至が本書の著者であることは明らかで、序文にも、「友人豊崎善之助君は本書を著すに当り大に予の業を佐けられき、併せ記して同君に謝す。」と明記している。

私はここに、この間の消息を物語る、貴重な村井知至の私宛の書簡を公開しよう。

拜復 陳は小生過般西下致候節、畑敏三君（筆者註、関西学院大学文学部教授）より又伴（筆者註、関西学院大学文学部村井勇吾教授）より貴下の事を承り、ぜひお目にかかり度存じたるにツイ其機會も得ず遺憾に存じ居る所へ、図らず只今貴書を忝ふし有難く拜誦仕候

実は拙著「社會主義」なる小冊子が御手に入りし由、同書は元より絶版にて小生の手許にも無之誰か友人間に所有する者なきかと探がし居りし次第に御座候聞く所によれば、あんなつまらぬものに金壹円八十銭を投じ御購入相成りたる由、（筆者註、私は昭和十一年十二月にや々と大阪で購入し

た。その喜びを今もおぼえている。）勿論これは石川啄木先生に關係ありし為との云々驚き入申候

右「社會主義」の内容は小生が芝唯一館の教壇から演説したるその草稿を集め、豊崎君に依頼して文章とし出版するに至りたるものに御座候

先日、京都に参り候時同志社大学文学部教授竹中勝男氏小生の旅宿にお見え同氏は明治年間に於ける社會思想執筆中にて既に千有餘頁の原稿出来上り遠からず出版さる由、而して氏は小生の社會思想につきかきしものを六合雜誌其他から集めおられ候てぜひ拙著「社會主義」をも一見したいと申おられ候に就き貴下が一部御所有の事をお話候間何とかして暫時拜借の上一讀したいとの熱望あり、小生自身も今一度見たいと存じ居り候間、貴下に御相談して見ようと云つて相別れたる次第に御座候、若し御差支なくば一寸御貸し願はれまじくや、一讀の上は必ず御返却可申上候

次に御質問の「國際平和論」（筆者註、これも啄木の愛讀者の一つで、稀觀本中の稀觀本、世の啄木研究家が誰れも見えていない

ものであるが、これも私は昨年、入手することができた。）なる書に就ては、小生更に記憶無之候

先は右御返事旁御依頼まで如斯に候

昭和十三年十一月三日

敬具

神奈川縣逗子町川間五四二

村井知至

私は、石川啄木晩年の社會思想に、大きな影響を与えた著書の一つに、村井知至の「社會主義」を挙げて語を進めて来たが、村井知至こそは、当今、英語を学んだ人が、ほとんど大部分、その若き日に御厄介になった、村井・メドレー共著「英作文」の教科書の著者明治十五年、二十歳にして同志社に入学、新島襄の薫陶を受けて、当時同志社に集った、幾多の英才と交わり、高い學識と信仰を得て明治十七年英學校正科を卒業した人であるといえ、読者は思い当るであらう。いずれ村井の略伝は後述することとして、村井の社會主義との関連を続けよう。

「社會主義」の最も詳細な研究と紹介は、住谷悦治博士の「明治キリスト教徒の社會主義思想、村井知至の『社會主義』について」（キ

リスト教社会問題研究」第六号、一九六二年四月)で充分であるから、今更述べる必要もないが、ただ一言ふれておこう。

村井は「社会主義研究会」創立期の会長であり、安部磯雄と共に、すぐれた理論家であった。

「日本社会主義文献解説」(細川嘉六監修 一九五八年二月、大月書店)、東大教授岡谷三喜男著「ともしびをかかげて」(昭和三十五年十一月、日本基督教団出版部)にも言及されているごとく、当時の社会主義理論を日本人の手でまとめた、最も注目される著書の一



ありし日の村井知至

つであった。

村井は、明治三十二年四月、社会主義研究第六回大会で、「カール・マルクスの社会主義」について報告し、近世の社会主義を理解するには、マルクスを研究しなければならなると、説いたけれども、「社会主義」では社会主義の経済的基礎の解明を認めながら、その倫理的方面に重点を置いて、貧富の懸隔と社会的害悪を排除する唯一の方法であること、労働組合の政治的進出の必要を提唱した。

村井が同志社卒業後、明治二十二年、新島の学んだ米国のアンドーバー神学校で、片山潜と出会い、当時著名であったタッカー教授から社会学を学び、アイオア大学では、ヘロン教授指導のもとに社会問題並びに社会学を研究し、更に米国各地の社会事業を視察した所産が、本書である。

村井の社会主義についての著書は本書のみに終り、その後は英語の教授に終った。

明治二十九年から大正九年まで、東京外国語学校教授、それから明治大学教授、第一外国語学校

の創立と英語教育に専心したが、昭和十九年二月二十六日、八十三歳の高齢で永眠した。死を既に予期した村井は、次のような墓碑銘を難司ヶ谷墓地の墓石に彫刻していた。妻、芳子も、夫を追うように、二年後には、この墓石の下に入った。

This stone
marks the last
resting place of
T. Murai and
of his wife
and posterity

村井の著書として、このほか世に知られないのは、大正四年六月随筆集「無絃琴」(四方堂書店) 大正五年、感想録「声」(至誠堂書店)があり、昭和十年五月から十三年三月まで毎月「蛙鼓」という小冊子を発行し、心に浮ぶままの随感を、私信として送ったのである。明治生れのキリスト教徒として、信念を貫いた人であった。俳句と俳画をよくしたことも人々の知るところである。

(商学部嘱託講師)

危険な被服



治 削 弓

早いものである。

繊維や織物を専門に扱うようになって、もう二十年に近くなってきた。当時の繊維の世界は、敗戦後の原料不足に加えて、その生産は微々たるものであり、戦前になかった新しい合成繊維が研究されはじめた時代であった。そして十数年、今日では第三の繊維、夢の繊維と称して、合成繊維の全盛時代を築き上げてきた。このように新しい繊維が作り出されるだけでなく、製品となった繊維にたいしても美しく着飾るにふさわしい性質を与えるための、高度な加工仕上も要求されてきている。

ここで、被服はなぜ着るかという被服の目的を、ふりかえてみよう。本来被服は人体を保護することがその目的であり、装飾、羞恥、礼儀など社会的と考えられる目的は、本来のそれに加味されているわけである。したがって、人体の保護をなおざりにして他の目的の遂行のために努力が続けられるようであれば、それは人間不在の被服で、ロボットにでも着用させたほうが良いと思われる。人体の保護、狭義には皮膚の保護について考えてみよう。

皮膚はたえない外界の刺激に対処しているが、これら刺激に対する反応が過度になると皮膚に病的な変化が現われてくる。皮膚に現われた変化は総称して湿疹と呼ばれているが、この湿疹の変化が現われた時には皮膚に何らかの刺激が加わっていることを意味する。このような原因を被服について考えてみると、まず繊維材料そのものによる原因が考えられる。たとえば、羊毛製品が皮膚と密着してすれ合ったときに皮膚炎症状を起こす例もあるが、最近、合成繊維の下着や装身具を着けたときに限って湿疹症状をおこす例が増加してきた。これは合成繊維は吸湿性が少なく皮膚表面に熱がこもり、色々な化学物質が使用された繊維であるため、何らかの方法で化学成分が変化し、皮膚に刺激を与えるためである。

次に仕上加工剤による原因がある。先にもふれたように最近、特に高度な仕上加工が要求され樹脂加工をはじめ、洗ってアイロンなしですぐ着られるウオッシュ・アンド・ウェア加工、耐久性のある折目やひだを与えるというパーマネントプレス加工、汚れを防ぐSR加工などに使用される薬剤は、明らかに刺

激性または有毒性の物質である。これらの薬剤の人体生理機能におよぼす影響は、全然無いたとは言えない。デパートの婦人服売場などで、これら樹脂加工に用いられているフォルマリンの刺激臭で目が痛くなったりすることまたナイロンの靴下をはいた途端にかゆくなったり、かぶれがでたり、その他パンティなど柔軟な皮膚と被服が密着して、すれ合うような部分に接触性皮膚炎がおこったりする。このような現象は、普通の人には何の作用もない場合が多いが、とくに敏感な人には何らかの作用を受けることが考えられる。

次に染料による原因が考えられる。食料品の着色剤については食品衛生法によって規定されているが、被服の染料についての規定はない。これは口から消化器管へ入ることはないが、皮膚から少量の吸収が考えられる。たとえば、含金属錯塩染料というのがあり、これらの染料の中にクロムが含まれることがあって、皮膚に刺激があることが考えられるが、これも大きな影響はない。なぜなら染色物には堅牢性ということが要求され、JIS規格に規定されているので、汗などにまじって体内に吸収することはない。しかし中には

堅牢性のない染料もあるので一部、感受性の高い人に害を与える場合も考えられる。

次に考えられるのは、最近問題になった合成洗剤の毒性に関連して、洗濯後の洗剤の残存による障害がある。これについては小谷氏らが市販中性洗剤の皮膚におよぼす影響についての報告がある。それによると、白鼠の後背部に市販液状中性洗剤の原液を塗布したところ、翌日には既に軽い発赤を認め、実験三〜四日目には毛の脱落、浸潤様肥厚を認め、十五日目にはほとんどの白鼠が死亡している。実際使用濃度の〇・二五%液では、翌日には特に変化はないが、八日目になると毛の汚染粗荒・光沢の消失が認められたと報告している。

皮膚に塗布して十五日目くらいで死亡するようであれば、かなり毒性の強い物質であるから、先にのべた洗濯後の附着についても注意を払う必要がある。

このように、日常着用している被服とくにな着類が、皮膚に障害をおこす素地をもっていることが考えられ、危険な被服といっても不思議ではない。特に汗をかいた時など、被服に加工してある仕上剤が、それらを溶出させアレルギー性のかぶれを起すことは、たと

えば、ニッケル貨を水と汗を入れた容器に入れたとき、汗の中に多量のニッケルが溶けだすことが、化学反応からわかる。したがって、感受性の高い人や、かぶれが生じた時には、汗をかくときそれらを身につけないことと、コーチゾン軟膏で早く治すことが必要である。

現今、問題になっている火事による死亡者の多いことは、合成繊維が燃えたとき、多量の濃煙を出し、その中に一酸化炭素や毒性をもつ、フォスゲンガス、青酸性ガスなどが発生して人体にかなりの影響を与えていることが知られている。

このようにのべてくると、それではどうすればよいかという問題になる。私たちのまわりには、危険な世界情勢、危険な思想、危険な年齢、危険な人々、危険な風俗などと、あらゆる危険性がとりまいている。だから私もまた危険な被服があっても仕方がないと、無意識のうちに危険な考えを持っているのかもしれない。あるいは、心の片隅に危険な被服だけでも取りのぞこうと、ひそかに願ひながら日々の研究を続けているのかもしれない。

安部磯雄と消費組合(一)

仲尾

宏



安部磯雄は明治の同志社がうんだもつともすぐれた人格の一人であった。草創期の同志社からは言論、教育、宗教、経済、その他の各界に多くの指導的人物をおくりだしているが、安部磯雄もまた、社会主義思想を伝播することによって明治後半の日本の思想界に新しい息吹きをもたらし、大正・昭和にあっては社会運動における一方の旗手として、また教育界の重鎮として重きをなしたのであった。安部の性格とその理想とした方向はみずから語っているように宗教者であることよりも、また政治家としてたつことよりも、教育にたずさわることをもつとも得意としたのである。しかし多感な青年時代の一時期を新

島裏の近くにあつて、理想主義的な精神生活をおくったこと、および幼時より深く心をうたれていた貧困問題——社会問題に対する彼の関心は教壇にたつ一学究としてその生涯をおわることをよしとしなかった。

よく知られているように安部の社会的活動は日露戦争を間にはさんだ明治の社会主義運動の先駆者の一人であつたこと、そして後年には社会民衆党党首としての、無産政党運動に対する献身がもつとも著名な活動であつた。これらの直接的な政治運動への参加だけではなく、安部はまた多くの改良的社会運動に対しても熱心にとりくんだ。その一つは明治四十四年、吉原遊郭の焼失後におこつた娼婦運動の提唱でありもうひとつは産児制限の普及運動であつた。

しかしまた安部はこれらの運動とともに消費組合運動のすぐれた唱導者でもあつた。戦前、日本において消費組合運動そのものがたずさわった人々の熱意と献身にもかかわらず、その実践方法の稚拙さ、客観的条件の未成熟、周囲の無理解、およびはげしい弾圧などによって離合集散をくりかえさざるを得ない歴史であつたように、安部がてがけた一、二の消費組合もいくばくも経ないうちに挫折する。だがまた他方では消費組合運動と社会主義運動との結びつきにあたつて旭山・石川三四郎や加藤時次郎とともにめだたないところで安部の力が貢献したことも否めないようである。のちにみるように安部の消費組合に対する造詣がなければ石川旭山も消費組合についての正しい理解をもち得ていたかどうか

からなかったし、加藤の直行団消費組合もつまれていなかったかもしれないのである。

二

ともあれ、安部磯雄は明治十二年から明治十七年までの同志社在学中にすでに彼の生涯に果すべき天職についておぼろげながら使命感のようなものを感じはじめていた。当時の同志社の禁欲的な精神風土は九州の片田舎から上洛してきた海軍軍人志望の少年にとっては全く異郷に学ぶ心地であったにちがいない。またその清々しい学窓生活のあけくれば彼の全身全霊を洗い清めたことであろう。

そして安部のキリスト教との出会いに決定的な役割を演じ、またその後の安部のユーリタシ的な人格形成に深い影をおとしたのはそのころ三十歳をこえたばかりの発潮たる新島襄の人間性とその神へのひたむきな献身、そして学生に対する暖かい愛情であった。安部入信の直接的動機は彼がわずらった大患であったけれども、安部の生来の純朴な性格と「黒い眼」の新島をはじめとする教師や先輩・同級生のキリスト教へのひたむきな熱情はたちまちのうちに彼を熱烈なキリスト者とし

た。またラーネッド、ゴルドン両米人教師をはじめ村原盛宏・山崎為徳・森田久万人・下村孝太郎らの良師、大西祝・綱島佳吉らのすぐれた先輩の知遇に接することができたことも青年安部磯雄の人格陶冶に大いに貢献したことであろう。同級生にはのちに東京専門学校（のちの早稲田大学）教授となった岸本能武太、東京外国語学校で教鞭をとった村井知至および新原俊秀・南熊夫・三輪礼太郎がいた。また柏木義圓も安部におくれること一年余、同志社英学校に入学したが学費に窮して一年ばかりで中退し、蘆花・徳富健二郎も安部入学の前年に入学していた。このような俊秀にかこまれた同志社の日々は安部の向学心をいやがうえにももたせたことであろう。事実、安部は友人たちとの散策や伝道に従ったほかはつとめて勉学にはげんだ。

明治十七年三月、安部は同志社英学校正科を卒業したが、その卒業式における演説の演題は「宗教と経済」であった。彼はキリスト教の普遍的な人類愛によって人間の精神生活面を解決することができるけれども、物質生活は経済学によって指導されるべきであるという考えをはいくもこのころから強くもつよう

になったのであった。彼に経済学を講じたのはラーネッド博士であったが、このときには彼はまだ社会問題の解決には社会主義によるべし、という結論には到達していなかったし、社会主義ということばをラーネッドからきいていても特別の関心を示してはいなかった。だが経済学とキリスト教を博愛主義で統一しようとしたとされるラーネッドの考え方に安部の柔軟な頭脳が強く影響されたことは充分想像できることである。

一方、安部のキリスト教に対する考えは当初からユニテリアンの色彩をおびていた。彼は同志社在学中も、社会にでてからも、信仰に対する疑念は一度もおこさず、生涯、敬虔な精神生活をおくったのであるが、当時の伝統的な神学——三位一体説を奉じ、聖書の事蹟を一字一句真実とする教えには強く反撥を感じていた。従って英学校卒業後、転入した同志社神学部の伝統的神学にみたまれた授業は到底、彼のうけいれるものではなく、親友村井知至とともにその改革を当局者に要求し、いれられないとみるや授業開始後十日にして荷物をまとめ帰郷してしまったのである。

三

彼の生涯の課題たる「宗教」と「社会問題」をきわめるうえで決定的な機会となったのは明治二十六年から二十九年までの米国およびドイツ留学であった。安部は滞米中ボストンからほど近いハートホード神学校で学んだが、ここの神学校もまた伝統的神学を一步も出るものではなかったので聖書の歴史的研究を課題としていた彼の心をみたすことはできず、彼の心はしだいに伝統的キリスト教から遠ざかり、愛読したトルストイやユージョをうじて、しだいにヒューマニズムそのものを思想の中心とするようになり、彼のことはを借りていえば「精神的キリスト教」へ傾斜していった。

彼はまた留学中にもう一つの課題たる社会問題の研究に多くの時間をさいた。彼は渡米前、岡山教会の牧師をしていた頃からすでに慈善事業に多大の関心をよせていたが、留学中にもニューヨークやロンドン、グラスゴーなどで多くの社会事業をすすんで見学した。この間、彼の思考と社会主義との距離を急速にちぢめたのはアメリカのユートピア社会主

義者・ペラミーの「ルッキング・バックワード」であった。そして彼が社会主義を理想としてかかげたのもあくまでキリスト教から出発したヒューマニズムの立場からそれを是としたのであった。この点について安部はみずから次のように語っている。

「言ふまでもなく私の社会主義思想が多くマルクスに負ふ所あるは事実であるが、私は其当時から現在に至るまで常に社会主義を精神方面から見て居た。私共は生きがために食ふのであって、食はんがために生きて居るのではない。結局私共には精神生活が目的であつて物質生活は其手段に過ぎないといふのが私の考へ方である。勿論私は宗教といふことを狭い意味に解して居ない。私は伝統的基督教の中に教育されたけれども、現在では人類愛といふことだけで私は生きるやうになつた。此人類愛を中心として宗教と社会主義が渾然として私の心に融和して居るのである。」（安部磯雄「社会主義者となるまで」二〇四頁）

四

明治三十年ふたたび同志社に教師として復

帰した安部は三年間の欧米留学で研鑽した学問への情熱と、彼地で見聞した先進国の社会の息吹きを胸に秘めて、意気軒昂として母校の教壇に立ったにちがいない。そしてまた社会主義こそが社会改革の唯一の思想であり、社会問題解決の指針である、という確信のもとに、日本の風土に社会主義思想を根づかせ、さまざまな社会改革の運動にのりだそうとしたにちがいない。

事実、安部の社会主義者としての活動はこの時期以降、せきをきったように一斉にはなばなくはじめられた。明治三十一年十月、「社会主義の原理と之を日本に応用するの可否を考究する」目的で社会主義研究会が東京芝四国町のユニテリアン協会で発足したが安部は幸徳秋水、村井知至、岸本能武太、片山潜らとともに卒先してその事業にとりくんだ。これは三十三年、社会主義協会に改組され、安部はその会長に就任した。また再度の同志社在職中にも彼は二つの新しい試みを行った。その一つは野球の創始であり、もう一つは消費組合設立の試みである。安部はのちに早稲田の野球部を創設し、日本学生野球の輝ける指導者として名声を博すが、安部が野

球をてがけた最初の場所が同志社であつたことは記憶されてよい。

消費組合の方は残念ながら今日、その事蹟をつまびらかにすることはできないが、明治三十七年の「平民新聞」第十四号に「消費組合の話」と題して内外出版協会よりだされている「家庭之友」という雑誌に安部が同志社で消費組合をつくろうと試みたことのでん末が報じられているとして、その一部が転載されている。以下、安部が「家庭之友」で語つたという全文を平民新聞から紹介しよう。

「前に申したやうな競争や迫害がありますから、加入者の団結力が最も必要であります。私が西洋から帰って一年ばかりの後に、同志社で、この消費組合をやることを主張しました。スルト何しろ学校側の（傍の意か）二軒の商店が、学生相手に非常に暴利を食つて居ましたから、皆が賛成して立所に成立ちました。そこで我が三四円宛の金を出して、一通りの品物を用意し、学生三人を定めの間、代る代る番をさせることにしました。初めは段々景気がよかつたのでありますが、現金制度であつたので月末になつて学生の懐淋しくなるがと、掛売をやる隣の店にやつて

行く、スルト品物を安く売る、珈琲を御馳走する全く九死一生の場合だから、一生懸命学生の御機嫌を取るのです。それで店番から現金制度を廢して、矢張掛売にしなければ……ツマリ此組合は失敗に歸して仕舞いました。そして消費組合のあつた間安売をした商店が、組合解散と同時に、云ふまでもなく元の商売に返つて仕舞つた訳であります。

最初まつ前の様に、薪炭醬油米塩位にして置いて小さな家一軒をかり、店番を雇ふことにし、加入者總体で月二百円位の需要があるなら、成立つて行くだらうと思ひます。併し仲間の中に唯目前安いものが買へるからといふ丈の考で、永遠の利害を思はぬ人があります。すなはち、組合と競争する為に、従来の酒屋米屋が一時値段を安くして、掛売とお世辞で毎日用を聞きに来ると、ツイその方の買人になつて組合の不利益を來すのでありますから、加入者は總て永遠の利益のために組合の發達を熱心につとめねばなりません。」

當時の同志社は学生数約三百人ぐらゐ、しかも綱領削除問題で学園内外が紛糾をきわめている渦中であつたから、この消費組合も今日の大学生協のように組織だったものではな

く、また再興しようという動きも途絶えたものと思われるが、もしこの記事に間違いがなければ同志社はわが国における学生消費組合揺籃の地であつたわけである。

（昭35大法卒）

* * *

* * *

お願い

研究資料として、左記の雑誌を捜しております。該当の雑誌をお持ちの方、またはその所在をご存知の方は、その旨をお教えいただければ幸いです。

同志社大学

人文科学研究所(CS)

*

『同志社文学会雑誌』第29号
刊行 明治23年1月
発行所 同志社文学会

新島襄の心意気

森 章 博

新島襄先生の第一二五回目の生誕日を迎えかつて同志社に学び、育ち、或は教え、関係を深めつつある同志社人が、この記念すべき場所集まり、創立者、新島先生の生誕記念会を持ち得る機会を得ましたことは、まことに美しい、喜ばしい、意義のあることであります。

私は創立者新島襄先生の四十七年にわたる生涯の一切は、すべて学園、同志社を中心として、そのための尽力であり、同志社そのものを自分の使命の実践の場として、教え子のごとく愛されておられたものといってよいと思います。先生は日本で始めて日本人の学校官許同志社英学校を作られ、基督教を「教育」という姿で深めるようにされたのであります。先生と同志社とは一体不可分のものであ

り、先生にはお子さまが与えられませんでした。が、今日、集まっている私たちは、先生のいわば子供であり、孫であり、先生を祖父、または父として先生の御一生をより深くよりひろく知り、本当の精神を学ぶことに努力すべき日と思います。都合によりここに集まれなかった全国の同志社の多くの方々も、それぞれ場所でこの日を記念していると信じます。このように、同志社人で新島襄の教訓を学びとることに結びつかない人は一人もないといつてよいと思います。このことは、官立の学校はいうまでもなく、他の私学でも余りみることの出来ない同志社の誇りであり、感謝すべき事柄でありましょう。

私はこの日にあたり、新島先生の心意気、苦しい過程にあつて、世のために奉仕と愛の

精神をもって、人生の本当の意義を自覚せられ、実践されたそのことについて考えることは意義が深いと思います。

先生の心意気は、矛盾、困難の連続の生涯において、それに打克つ勇氣とより正しい、より美しいものにあこがれ、創り出すエネルギーの中に示されております。新島精神とは生々発展、希望前進の原動力となりうる統一し秩序を与える逆境への勇氣と力に示されることが多いと考えます。先生について多くの伝統がしるされておりますが、私たちがその伝記から学ぶ時、先生の生涯が苦闘の連続の中においてさえ、自分のためにではなく、日本のため、基督教主義の学校教育のために、休まざる意気込みをもってあらゆる逆境にもめげずいばらの路を切り開いて圧迫と誤解にまけることなく、自分の理想実現を通じて人類のより良きより正しい美しい社会の建設につくされたことを深く感じるのであります。『新島襄書簡集』の文字の一つ一つに、『同志社九十年小史』のそれぞれの記述を読む時、先生の脱藩、滞米の目的がいかに熱烈な愛国の意気からであり、あの非常な困難な時に、同志社を創設され、闘病生活中にも大学設立

のため血のにじむような教学の確立と財政の確保のための運動に尽力されたかに深く胸を打たれるものがあります。また、文部大臣から官僚の地位につくようにすすめられたことに對し、毅然として自分の理想のため、安易な妥協をしなかつた勇氣を私は「新島襄の心意氣」の一つとして強く感知しており、皆様にもお考え願いたいと思うのであります。

「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らんことを」という先生のお言葉は、当時の学生横田安止に書かれた書簡の内にあるものです。が、この中に、先生の心意氣がこもっており、また、これは全人類の真理を示しているものだと思ひます。このような先生の精神によつて基礎づけられた同志社教育の理想は最も光榮とすべきであり、これにおいてこそ学園、同志社が、基督教に学び、先生の一生がみえざる御神の手に導かれたように、私たちは、神の教を守り、祈り、良心に恥じないような進み方をしなければならぬと信じます。

新島襄先生は、基督教同志社のため全生涯を苦難の中に勇氣と良心をもって常に希望の中に進まれ、希望の中に昇天されたのであります。それは要するに先生の心意氣を基礎

的に支えた基督への信仰にあつたからといえましょう。私たちは先生の遺訓を單に言葉としてでなく、その意味を正しく把握して実践すべきものといえましょう。今日、教学の場としての同志社が、どういう理念をもつて今後進むべきか、具体的にどうすべきであるかなど考える必要が急務であらうかと思ひますが、国立の学校のまねをすることや、かりに良心的でないような学園の進み方が現存していてもお互いに注意しあうことをしないことなどがあれば、新島先生の心意氣とはほど遠

新島先生の大学設立計画

今日は新島先生の教育の思想につきましてお話をしたいと思ひます。

新島先生の同志社大学の設立の計画は、大體、明治十五年ごろから具体化されるようになってまいりますが、それは同志社の英学校をおつくりになった時の構想とは少し變化をきてきているように思ひます。

先生はあのラトランドの集會において声涙

いものもとを考えます。

私は同志社は、さきほど申しました点を自覺し、理解を深め、教育の場としての理念を広く天下に叫び、賛同をうべきだと思ひますし、同志社人として家庭生活においてもその精神を實踐することが大切と考えます。記念すべきこの日、静かに先生の精神を全国の同志社人が考えるならば、学園同志社はますます建学の精神を深めることになりましょう。

(文学部助教・教授・教育学)

酒 井 康

ともにくだる熱烈な演説をなさり、帰國して日本にキリスト教主義の大学をたてるということについてアピールをなさつたわけですが、けれども、その時に先生の心の中にあつた大学の構想は、やはりアーモスト大学のようなベラル・アーツ・カレッジであつたのだと思ひます。

そして先生がお歸りになつて同志社の英学

校をおたてになる。これは始めは中等学校レベルの学校でありましたけれども、やがて高等普通教育の機関、すなわちリベラル・アーツ・カレッジとして成長していくわけであります。けれども先生は、日本の社会のために普通学だけではなしに、専門学の大学をつくらなければならぬんだ、ということをお考えになりました、数種の学科を含む総合大学をつくろうとされるわけであります。これが同志社大学の構想として形づくられてきますが、そのような総合大学の上に、更に大学院の設置をも考えておられたようであります。

そのような構想の中に、先生はまず第一にキリスト教をもって徳育の基本とするというキリスト教主義の大学の姿というものを描いておいでになります。先生は「同志社大学設立の旨意」の中で次のようなことを言っておられます。欧州の文明はキリスト教の文明であり、キリスト教は血液としてそこに流れている。同志社はただ科学、文学の知識を学習させるだけではない。これらの知識を運用する品行と精神をやしなうことを求めている。これをなさしめるものは生きた力のあるキリ

スト教主義でなければだめだ、というふうに言っておられるわけであります。

つぎに新島先生の私学思想について少しふれてみたいと思います。

明治政府は国民皆学のうたい文句と共に中央集権的な公教育体制を上から布いてまいります。このような公教育の考え方に對して新島先生の教育制度に関する考え方はきわめて對照的であります。教育は公のものだけではないのだという考え方、つまり教育は国民の責任であり、下から民主的に組織されていかなければならぬものだという考え方であります。教育というものが国家のものであるだけではなくて、教育は一人一人の人民の責任によるものであり、人民の働きによってなわれていくものだという考え方がそこにはあります。この考え方の中には先生が学ばれたアメリカの、ニューイングランド地方におけるピューリタニズム、特にコングレゲーションリズムの思想や、社会活動というものが非常に深く影響しているように思われます。住民がみずからの手で教会と共に学校を建て、また入植後十五年を経ないであのハーバート・カレッジを設立した。そうしたことが先生の

心の中には非常に強い感銘として残っていたようであります。先生の同志社における教育の実践に示されているのも実はこの精神ではないだろうかと思えます。それは一面嚴肅な宗教的聖潔を保有すると共にすぐれて自由主義な個人尊重の精神であります。先生の愛国思想にしても当時の風潮であつたいわゆる富国強兵とか、貿易の進展を願うころとしての愛国心ではなしに、正しい隣人愛から発する愛国心を強調しておられるのであります。

第三に私は先生の企図された大学の性格について述べてみたいと思えます。

これは先生がアメリカにおいて学ばれた大衆モデルにしたものだということは明らかであります。わが国では、明治十九年以後、学校教育制度に関してはドイツ的な性格が全般を支配するわけですが、新島先生のつくろうとされた同志社大学はアメリカのスタイル、つまりリベラルアーツ・カレッジの精神を基礎として組織されるべきものであつたと思うのであります。単に専門職業的な能力のある人間をつくろうとしているだけではなくて、円満な教養を土台としている専門家の養成を目的としてたてられようとしたわけ

あり、これは戦後の新制大学がとり上げた一般教育の原精神を明治中期の同志社がすでにその大学設立計画のうちに実現させようとしていたことを示しております。当時、日本にはドイツの大学組織にならった帝国大学が唯一の大学であり、それはもっぱら「国家の需要に応ずる」學術の教授・研究を目的としていたのに対して、新島先生の大学計画にみられる教育精神は歴史的に意義深いものであったと思います。

現在の同志社は専門職業的な教育の傾向にならぬが、しかし一面また新島先生の精神を受継いで、自由な教育の精神を生き続けさせようと苦心をしているように思いますけれども、この際もう一度、同志社大学の根本理念を考えてみるべきだと思えます。

先生がいわれた「自由教育 自治教会、兩者並行 国家万歳」というあの教育の理念が現在の同志社においても明確に再認識されることが大事なことではないかと考えるものがあります。

(女子大学教授・教育学)

本稿はさる二月十二日、新島会館で行なわれた講演の要旨です。

新島 襄 研究参考図書

*印、図書館蔵架

- | | | | |
|------|--|------|--|
| (1) | *My Younger Days 同志社校友会 Joseph Hardy Neesima (J.D. Davis 著、稀本) | (14) | 新島襄先生言行録 (石塚正治編、稀本) |
| (2) | 新襄先生伝 (右の和訳、村田・松浦訳、稀本) | (15) | *新島襄片鱗集 (森中章光編、絶版) |
| (3) | *新島襄先生 (右の増補版、山本訳、絶版) | (16) | *回顧七十年 (深井英五著、絶版) |
| (4) | Life and Letters of Joseph Hardy Neesima (A. S. Hardy 著) | (17) | *社会主義者となるまで (安部磯雄著、絶版) |
| (5) | *新島襄先生書簡集 (森中章光編) | (18) | *Davis, Soldier Missionary J. M. Davis 著、稀本) |
| (6) | *新島襄先生書簡集統編、附新島襄詳年譜 (同右編) 同志社校友会 | (19) | 同志社ロマンス (松浦政泰編、稀本) |
| (7) | *新島襄先生書簡集 (同志社出版部) | (20) | *新島先生記念集 (校友会編) 警醒社 |
| (8) | *新島襄書簡集 (同志社編、岩波文庫) | (21) | *同志社九十年小史 (社史編集所編) |
| (9) | *新島襄先生 (徳富蘇峰著) 同志社出版部 岩波書店 | (22) | *雑誌「新島研究」季刊・新島研究会 |
| (10) | *新島襄、人と思想 (魚木忠一著) 訂正四版 同 右 | (23) | *新島襄 (渡辺実著、人物叢書) |
| (11) | *新島襄 (岡本清一著) 再版 同 右 | (24) | *新島襄先生略伝 (加藤延雄著) 改訂六版 日本銀光美術出版社 |
| (12) | 新島襄先生を偲ぶ (大塚節治著) 同志社本部 | (25) | 々々新島年譜および文獻 |
| (13) | 新島襄言行録 (永代静雄編、稀本) | (26) | 新島襄先生の生涯 (森中章光著) 泰山房 |
| | | (27) | 新島先生と徳富蘇峰 (森中章光著) 同志社 |

邦楽とアメリカ

津 田 道 子



ワシントン大学学生の邦楽演奏会

私は、一九六六年九月より一九六七年六月まで、米国国務省交換学者として渡米、ワシントン州立ワシントン大学音楽学部の招聘教授として日本音楽研究指導及び地歌、箏曲の実技の教授をしてまいりました。

しかし、考えてみれば変なことです。日本の諸学校における日本音楽のとりあげ方を見れば、義務教育機関である小、中学校ではレコード鑑賞が関のやま、高校にあつては課外活動以外ほとんどかえりみられず、大学では音楽学部があつても洋楽一辺倒といつても過言でない時、外国の大学が興味を示し、研究の対象とするというのですから。日本では、米国における「日本ブーム」ということがよく言われますが、私のみた限りでは、この「日本ブーム」に影響されての日本古典音楽の研究ではなく、今までに研究されていない未知の分野を研究するという要素が多いように思いました。

私のまいりましたワシントン大学は、フォード財団の援助によりアジア文化センターを設立、そこで今まで余り研究されなかったアジア諸国の文化について調査、研究を開始、最初は、その一つとして日本音楽もとりあげられていました。しかし現在、音楽学部の

一講座としての重い位置をしめるようになりした。すなわち音楽学部の講座の一つとして Nonwestern Music の名称をもつ教科が設けられ、日本、インド、朝鮮、東南アジア諸国の東洋音楽の講義をし、演習としてそれらの国々の音楽、実技を行なうようになっていくのです。たとえば日本音楽としては雅楽、地歌、箏曲、尺八と、多方面にわたつてとりあげられています。

設備の点よりみても、本家の日本より、文部省指定の基準をはるかに上まわったもので最も多種の楽器を必要とする雅楽ですら、全ての楽器がそろえられており、それも一揃というのではなく、一番かさの高い雅楽用の箏ですら三面も用意されており、雅楽のために特別なステージが設けられています。実技の指導は、日本に三年あまり滞在し、宮内庁の雅楽部で修業された米人があたつており、その演奏は京都の雅楽会よりよほど上手と自慢していました。地歌、箏曲は私が受けもちま

した。楽器は箏三面、三味線三丁、胡弓一が用意され、楽譜は学生に無料で与えられていました。

設備の完備ということは米国の大学が経済的に恵まれているためであることはいまでもありませんが、アジア地域が米国にとって重要な地位を占めてきたことを敏感に受けとめていることも、一つの要因ではないかと考えます。もちろん、大学及び大学の設立者の現状の受けとり方、そして現場よりの要望の受けとり方が、日本とは全く異なるように思いました。今はやりの「日本ブーム」という言葉のもつ浅薄な意味での日本研究はなされていませんでした。

*

学生の実技に対する態度は大変真面目なものでした。雅楽においては、個人教授により各パートを教え、最後に一同集って演奏する方法をとっていました。学生は約二十人ほどでしたが、みな一風変わった人ばかりでした。長い髭のはえた人、ヒッピースタイルの学生靴をぬぐと靴下から息もつまるほど香水のにおう学生、なぜ映画の女優にならないのかと思われるほどのアメリカ美人、過去五年間

龍笛を吹くためにのみ大学へ通って来た一寸法師の女子学生ら、とてもよい人たちで、結構楽しく過しましたが、その心の底には、音楽を通しての東洋へのあこがれがあるようにみうけました。なかには「単位のため致し方なく」という学生もありましたが、結局は長つづきせず落伍してしまいました。いつでも集まる学生たちは、雅楽の音色のとりこになっている人たちだったようです。

私のところに来る学生にもいろいろな人がありました。楽器の修理をアルバイトとしている中国文学専攻の学生、大工の息子で将来日本に留学したいという人間学専攻の人、余り日本音楽を研究する人が多いので専攻をやるけれども箏曲は好きなので習うという民族音楽専攻の女子学生、日本文学専攻なので日本を知るためにという学生、米国籍だけれども人種は日本人だから先祖の音楽を知りたいという三世の人、あなたのコンサートで日本音楽をはじめて聞いて好きになったという恋愛型、もと中学の音楽教師で頭にはほとんど毛のない三十九歳のユダヤ人、だいたい男女比は半半か、四対六ほど、白人と日本人の比は七対三ほどでした。白人は熱心で、彼ら

の練習の要望に答えるには箏三面、三弦三丁は少くないほどで、大学の私の部屋だけでは足らず、廊下へもちだして練習する人まであらわれる熱心さでした。とにかく単位の間係はあるにしても、やるからにはおわりまでしなければという気がまがみえました。上手になるならなはいは、その人の天分が大きく左右しますので、練習に比例しない人もよくありました。習った動機には「日本ブーム」という風潮の影響があるかも知りませんが、そのあとは「日本ブーム」ではおっつかない努力が要求されますので、まことにしんどいことだろうと思いました。

*

明治維新は日本人の眼を未知のものへとむけ、新しい西洋文化の吸収にかりたてて日本の近代化が進められたのですが、この事業は日本固有の文化の犠牲の下でなすとげられたことを、明治百年を祝っている今あらためて考えてみる必要があると思います。このことは音楽教育においてもはっきりと見受けられることは先に申しましたが、箏曲の分野においてもその内容にはっきり西欧化があらわれました。洋楽に影響された曲が数多く作曲さ

れたが、洋楽の基準からいえば表面的な形式の模倣が多く、とるに足らぬと断定されるものがほとんどで、それを取捨選択なしに弾き寺小屋式に教えたということは、もちろん、その当事者の無教養さと言いきればそれまでであっても、この問題のはらんでいるものは無意識の古典輕視に他ならないと思います。

このような風潮の下で、洋楽を模倣した日本楽器による音楽は、外国人にとっては身近かなものではなく、彼らの標準により、最高の作品と比較されるのですから、歴史の短い底の浅い洋楽観より作曲されたものが受け入れられるには、彼らの眼は余りに厳しすぎるのです。私は全てのこのような新しい観点よりの創作活動を否定するのではなく、また創作されたものがすぐれていないと言っているではありません。そのあるものは高く評価されていますが、それはただそれだけのことにすぎないのです。

宮城道雄の日本音楽への、近代化への功績は、その作品の評価にはかわりなく大きいと考えますが、それは日本人の尺度によるものであり、日本の歌曲の歴史において意味があるものであって、外国人にとっては洋楽の模

倣いということのため興味もないし、研究対象にはもちろんならないものなのです。にもかかわらず次のように言っているのは、他の作品に對する彼らの評価がいかほどであるかを明確に示しています。或る民族音楽の専門誌に日本で発行された歌曲のレコード紹介があり、その批評として「……この新曲をきくと宮城の曲がいかにもましであるかがわかるであらう……」とありました。宮城曲をはめるのではなく、他の曲がいかにも幼稚であるかを示しているのです。

この日本音楽の受けとり方というのは、米国における少数の特殊な人々のものであって、いわゆる一般の人々には縁のない外国音楽であり、「日本ブーム」と言っても現在日本に流行しているミニ・スカートにはおよびもつかないもののようにです。日本古典音楽の受け入れ方は、彼らにとっては未知のものと「珍奇」さが彼らをひきつけるのではなく、曲そのものが彼らに深い感動を与えることにあるのです。今より百五十年／＼二百年前に作曲された替手ものを聞き、近代フランス音楽のセンスをもっていると云った人があります。私はこれを特別な讃辞とは思いません

が、日本の評価との違いを知りました。洋楽の理論にあわないうことは、別に、真の音楽ではないと言ふことにならないし、盲人の感で作曲されたから、程度が低いともいえないという考えが素直に理解されているのです。ただ新しいものに対して日本人は大變意欲的であることは知られているのですが、古典を大切にしないということには大きな不満を示し、なぜあのすばらしい古曲が日本人に感動を与えないのかと不思議がり、わがことのようにいきどおり、古曲は音楽的に満足させるすばらしいものであるからこそ大事に守り育てるべき任務が現代の日本人にはあると主張します。洋楽とは全く異なった要素より成立っているものめづらしさ、自分たちに日本のような長い歴史がないことからの発言であることはみのがせないとしても、それのみではない内容的な面からの発言であるのです。伝統的な文化を破壊するようなことはしたくないという心はいろいろな面でみうけられますが、このように語る人々の心には、伝統的なものへのあこがれが、私たちの心の底にある新しいものに対するあこがれと同じようにあるのだとつくづく思いました。このよ



ハーバード大学の風景 (Official Register of Harvard Univ. より)

アメリカ瞥見記

うな心は若い学生の行動にもあらわれまして。米人にとって最もつらいことは日本人のように坐ることなのです。椅子を使用する筈を使うように申しますと、日本では坐って弾くものを坐る習慣がないからといっ

て椅子を使用するのは、伝統に反することであり、破壊に等しいからしたくないとこぼれました。音楽本来の意味から見ればこのような生理的な苦痛をあえてすることが伝統に従うことではないとしても、われわれには一考

まえがき

文部省と合衆国教育委員会との共同計画、「教員発展計画」により国立大学の年長教授四名がフルブライト・グラウンティとして指名を受け、私はその一人として、六十日間（昭和四十二年二月十一日より）合衆国における「外国語としての英語」教育を視察することができた。

かえりみると、私は大学卒業以来海外へは出たことがなく、四十年にわたって旧制中学校や専門学校や新制大学の教壇で英語をしゃべって来た。いわば箱根山を越えたことがなく箱根山の彼方の「江戸っこ」をしゃべるのに似た芸当をして来た。

何という冥加なるかな 六十日

する必要はあると思いました。新しい、活動的な国で、伝統を守れと言われたことは、皮肉でなく忠告であったと思っております。

（昭25大文卒・地唄箏曲家）

堀田由之助

アメリカ視察の旅に名指さる

この腰折の始めの十二字は指名を受けた時のいつわらざる気持。まったく感激と鳴謝のうちに在日合衆国教育委員会へ「ご指名を有難くお受けする」旨の返辞を差出すと同時に受ける者の責任を痛感したわけである。

合衆国における足あと

昭和四十二年三月十一日の夜、大吹雪をういて東京羽田を出発（パンアメリカン機で）同日昼下りにサンフランシスコ着、四月十三日までに視察した大学その他の語学教室は次の通り。

二月十二日——三月三日、サンフランシスコ・ステート・カレッジ。二月二十日、モントレイにおける米軍語学教室。二月二十七日

カリフォルニア大学(本部)バークレー校舎。
三月二日、スタンフォード大学。三月六日、
ロスアンジェルズにおけるカリフォルニア大
学。三月八日、南加大学。三月十三日、十六
日、テキサス大学。三月十七日、サンアント
ニオにおける米空軍語学教室。三月二十一日
——二十四日、ミシガン大学。三月二十八日
バッファローにおけるニューヨーク・ステー
ト・カレッジ。三月三十一日、ハーヴァード大
学。四月一日、ニューヨーク大学。四月六日
ワシントンD・Cにおけるフォーレン・サー
ヴィス語学教室。四月七日、ジョージタウン
大学。四月十日、合衆国厚生・文部省。四月
十三日、ハワイ大学。

なお「外国語としての英語」教育視察の
たわら私は次の名所・史蹟や美術館等を見物
した。

二月十八日、カリフォルニア・ミル・ヴァ
レーにおけるミューア・ウッズ国立記念物。
二月二十五日、カリフォルニア・ソノマにお
けるジャック・ロンドン記念公園。三月八日
ロスアンジェルズ美術館。三月十日、サンマ
リノにおけるハンティントン図書館。三月十
一日、グラランド・キャニオン。三月十六日、

オーステンにおけるオーヘンリー記念館。三
月十七日、サンアントニオにおけるアラモ教
会遺跡。三月十八日、シカゴ科学・産業博物
館。三月二十六日、ナイアガラ瀑布。三月二
十九日、ボストン古文書博物館。ロングフエ
ローの家。三月三十日、スリーピー・ホーロ
ー墓地。コンコード古物収集館。エマソンの
家。三月三十一日、ボストン美術館。四月一
日、国連世界議事堂。四月四日、エドガー・
アラン・ポーの小家。四月五日、フィラデル
フィア・インデペンデンス・ホール。フィラ
デルフィア図書館。ペンシルヴァニア歴史協
会。ベンジャミン・フランクリンの墓。ホイ
ットマンの家。四月八日、ホワイト・ハウス
(内部も)。スミソニアン協会。自然科学博物
館。四月九日、リンカーン記念堂。アーリン
トン国立墓地。無名戦士の墓。故ケネディ大
統領の埋葬地。四月十三日、ホノルル・バー
ル・ハーバー等。

「外国語としての英語」教育

一九三九年、ロックフェラー財団の補助金
で潜水研究中のラテンアメリカの科学者の一
人が、言葉の不自由からノイローゼにおちい

り自殺した。このため合衆国政府は一九四一
年、ラテンアメリカからの留学生二十数名を
専門の研究に従事するに先きだちミシガン大
学で一定期間英語を集中的に勉強させること
にした。これがミシガン大学英語研究所の始
まりで初代所長はフリーズ博士。翌年よりラ
ドー博士の加勢を得て一九四九年、「外国語
としての英語」教育の原理——いわゆる「口
頭文型練習」の原理——が確立した。

一方、一九四一年、世界大戦が起るや陸
軍教育計画により、また一九四三年よりは陸
軍特別訓練計画により世界各国へ進出するア
メリカ軍人のために各種外国語のインテンシ
ヴ・コースが数十の大学で実施された。

今日、合衆国の各大学において多種多数の
外国人学生に対し「外国語としての英語」が
能率的に教育されているが、その原理はいず
れもブルームフィールド博士の言語学に基づ
き、その淵源はポーア一派のアメリカ・イン
ディアン言語の研究より示唆された外国語
の学習原理に由来するものである。その原則
を要約すると、

(一)言語の本質は *aural-oral* である。その
教授と学習に、「聞き方」「話し方」から「読

み方」「書き方」への順に、「繰返し」によってその言語の「自動的習性」(automatic habit)を身につける。——これすなわち Aural-Oral Approach である。

(イ) Aural-Oral Approach の方法。これにはいわゆる Mim-Mem (Mimicry-Memorization) Method と Pattern Practice Method が用いられる。前者は stream of speech を「理解」し forms の「暗誦」と「繰返し」によってその言葉の automatic oral production の体得を期するものであり、後者は bilingual comparison による教材に基づいてまず発音次に文の構造に関する練習を行ない、文中の語の入替によって種々の situation へ導くものである。

(ロ) 教室における授業の補助または復習にレコード、テープ、フィルムを始め語学実験室の実用価値が認められ、外国語教育の能率増進の上に Teaching Machine はいよいよ研究され活用されつつある。

雑感あれこれ

(一) 先きに述べた通り昭和四十二年二月十一日夜大吹雪の東京を出発、同日昼下りに春暖

のサンフランシスコへ着いたが、旅館でオーバーをぬぎ捨てたまま三月十八日シカゴへ着くまでオーバーは不要であった。なおその三十五日間に雨に出会ったのはロスアンジェルスで一回(三月十一日)それも小一時間のおだやかなサン・シャワー(狐の嫁入り)で、その直後私はたまたまアンバサダーホテルの前を通ったがホテルの前庭からカタツムリが多数歩道へ這い出していて踏まぬように歩くのが難しかったことを覚えていいる。

ちなみにサンフランシスコへ着いた翌日、ステートカレッジの庭で紫陽花が咲いているのを見つけ、紫陽花はいつ咲き出しいつ消えるかと聞くと、驚いたことに年中咲いているという返辞。常春はよいが、これでは季節感がなくて俳句の世界などは思いもよらぬことだろうと思った。

シカゴ市には三月十八日から三日間滞在したが、道路のかたわらなどには古雪が消えずにあり、その上に雪あるいはみぞれが未だよく降った。ホテルを一步出ると誰もオーバーの襟を立てた。

合衆国といっても西と東、南と北では、全く同日の論ではない。

余談ながら四月六日から一週間ワシントン D・C に滞在したが、ボトマク公園はもちろんホテルの庭でも桜花満開、私は例年よりも沢山花見をした。

(二) 六十日間に十二種のホテルに泊ったが、宿泊料(食事は別)平均一日十五ドル。私たち一行四人は一室へ二人ずつ泊ったので各自一日七ドル半。食事はカフェテリアかドラッグストアで一食一ドルないし二ドル。たとえば三ドルないし五ドルの食事をしてもグレープフルーツとアイスクリーム以外は私にはうまくもまぐくもなかった。サンフランシスコで「一タ」「三平」という日本食堂で親子丼を食べたが、吸物つきで一ドル半、これは案外うまかった。

散髪は刈るだけ(剃るのは襟足だけ)で二ドルないし二ドル半。ちなみに刈るのも剃るのもすこぶる不器用、その技術は日本人が世界一ではなからうか。

(三) 訪問した各大学の教授も学生も私たちに対しては親切そのものであった。一例をあげると、シミガン大学の女子寄宿生の有志数名が私たち四人を晩餐に招いてくれ、その一人は可憐にも炭坑節を踊って見せてくれた。わ

けをたずねると「自分は日本へ行ったことはないが伯父が日本見物をし、その時覚えてかえり、教えてくれたのだ」ということであつた。

その他私が接触したアメリカ市民の大多数特に「ヴォランティア」と称する人たちは特別に親切であつた。自分の車で献身的に名所案内を買って出、しまいに自分の家庭へ招き入れてご馳走までして下さる方があつた。私は在日合衆国教育委員会へのレポートに次のように書いた。

「フランクリンならびに同時代のアメリカ人は『神は自ら助くる者を助く』を強調したが今日のアメリカ市民は『神は他人を助くる者を助く』を旨としてふるまい、特に外国人に対しては常に積極的に親切な奉仕をしようと思がけているようである。——これは日本人のみならず何国人でも真似るべきことと思う。」

(四) アメリカ文学特に十八、十九世紀のそれに私は多少関心を持っているので、エマソンの家、スリーピーホーローの墓地その他コンコードの各旧蹟を始め、ロングフェローの家、ホイットマンの家や墓、フランクリンの墓、

ポーの小家、オーヘンリー記念館、ハンティントン図書館、ジャックロンドン公園等、大げさながら私の呼吸をとめ眼を見はらせるものを沢山見ることができた。その喜びをひとつひとつに述べるには紙面もなく、多少ひとりよがりになるおそれもあるのでこゝには省くが、次にその時々腰折を二三披露することを許されたい。

この眼にて うつつに見入りぬ 呼吸とめて

リンカン フランクリン ポーの筆跡

(三月十日、ハンティントン図書館にて)

目のあたり ポーの家 悲しみの家を見る

鳩雀リスは 無心に遊ぶも

(四月四日、ポーの小家にて)

その水を フランクリンが 飲みしとふ

デラウェア河には 油浮きおり

(四月五日、フィラデルフィアにて)

ケネディの 歩みし街を 我れも歩む

ジョージタウンに 雨はそほ降る

(四月七日、ジョージタウンにて)

(四) 私は中学入学以来大学卒業まで十一年間英語を学び、その後四十年間教壇で英語を読んで来たが、このたび合衆国の土を踏んでみてアメリカ英語がどのくらい聞き取れたか。

残念ながら耳でよりもその時その場の状況判断等で辛うじて理解できた面が多い。サンフランシスコで六歳の男の子としばらく遊んだ時、その男の子が私の顔を見ては「ワチャナム」「ワチャナム」と問い、私は面くらつた。それが名をきいているのだと判つたのは数回問われてからであつた。その時の腰折——

子どもより 「ワチャナム」と問はれ

幾度も 戸惑ふてありき 我が耳悲し

(三月二日)

思うに半世紀にわたり私は耳と口をあともわしにして主として目と手で英語を学んで来た、いわば語学的ピッコあるいは不具者である。そして今更ながらこの拙稿の第三章で述べた「外国語としての英語」教育の原則に至極妥当と考える次第である。

(昭2大英卒・大阪教育大学教授)

大学予科の思い出 (二)

南石福二郎

軍事教練

私が大学予科に中学から転じたのが大正最後の十五年四月であった。数カ月の先任者に山田貞夫氏があった。数カ月後に五名の軍人が同志社に入ってきた。学校における兵式体操を応援するために陸軍省から現役軍人を全国各学校に好意的に派遣するというのであった。それで大学学部には金子規大佐と村上大尉とが、大学予科には三宅俊雄中佐が、中学には上山慶蔵少佐が派遣されて来た。高等商業学校にも某中佐が派遣されて来た。

この軍人たちはきわめて低姿勢で、すべて学校の教育方針に従い、大学では石原淳太郎先生の部下となり、中学においては乗松吾三先生の部下となって兵式体操教授のお手伝い

をされたのである。上山少佐はよく同志社建学の精神を学ぶことに努め、同僚の人たちともよく和して中学の兵式体操を充実させた功績は、現に推薦を受けて校友会の入会々員となっていることによっても知られる。金子大佐は同志社精神を把握するようにと熱心に努め毎朝、神学館講堂にて行なわれる礼拝には忠実に出席し、学生と共に讃美祈禱に和し勸話に耳を傾けられた。金子大佐がそうであるから村上大尉もまた同様であった。金子大佐は同志社配属を最後として予備役となり、洛北に余生を送り、今は故人となられた。

村上大尉は転勤を重ねて昭和十九年再び今度は大佐として配属されて来た。この時は同志社のみならず日本国中が苛烈なる戦時態勢となり、昭和初頭とは別天地の状況になって

いたのにもかかわらず村上大佐はなお昔の村上大尉の協調姿勢を維持しながら、戦争末期における軍の目的を誤らぬように努められた。三宅中佐が大学予科の教授同僚間に友好関係を深く結ぶことに努め、したがって教授たちをして軍に對し好感を持たせるように努められたことは顕著なことであった。中佐はそれから累進して中将に進み、終戦までインドネシアに司政官であった。三宅中将が中佐で予科の配属将校であった当時いかに好印象を残していたかということは、同志社九十年記念祝典のおり山田貞夫氏その他私も交えて数名の昔の同僚が同中将を招き、同志社も学賓として迎えたことによって知られる。以上が配属将校制度の始まりであるが、それがだんだんと軍国主義推進の路線を敷くことになったのである。

軍国主義の路線

配属将校制の初めは学校における兵式体操教授の応援ということであった。それがだんだんと積極的に教練を指導するという建て前になってきた。更に教練を通じて政府が軍国主義を全国学校教育に注入するということに

なり、配属将校はその動脈となつたのである。

大工原銀太郎先生が総長に就任した翌年であつたか、毎年行なわれる教練の査閲が行なわれた。第十六師団から某少将が査閲官として大学に派遣されて来た。少将は配属将校から提出した報告書類を見ながら、

少将「皇室中心主義の教育と——ここに書いてある。これはよろしい。ところだ」

といつて大工原総長に向ひ、

少将「御真影を奉戴していますか」

総長「……」

かたわらにあつた予科長日野真澄氏が見かねて、

日野「高等商業学校では最近に校舎の新築が出来たので、御真影を奉戴し、講堂の正面をそのまま奉安庫としていますが、大学の方ではまだ奉安の設備が整っておりませんので、まだ御真影を奉戴しておりません。いずれは奉戴を願ひ出でるにふさわしい体制を整えてからと考えているのであります。」

少将「ああそうですか。どうぞそういう風に運んで、配属将校をしてその職務を行ひや

すからしめるようにして下さい。」

今日でいへば許し難き大学の自治干渉であることが、その当時においては当然のことであつたのである。

またそれから後配属されて来る将校の中に傍若無人の振舞をなす者もあつた。高等商業学校では新築の武道々場に学生が神棚を造り三宅八幡の幣を奉祀した。そしてそれは配属将校三浦某中佐の命令によるものであつた。

大学予科では配属将校草川某中佐が入学式の席で新入学生と父兄を前にして、「自分は総長湯浅氏とは意見を異にしている。自分は自分の信念によつて教練を行う。これは軍の命令であるから左様心得よ。」と宣言した。そして全予科学生に号令してストライキを行わしめ、学生たちをしてチャペルに籠城させ、中からカンヌキをかけて外との交通を断ち何事か総長に要望せしめるというようなこともあつた。それと関連があつたかどうかは明らかではないが、その当時学園内は右翼団体の跳躍するところとなり、有終館にある予科教授室が検察当局の搜索を受け、一、二の教授が検査されるというようなことがあつて結局は湯浅総長が辞任するということになつた。昭和

十二年芦溝橋事變の起つた年のことである。

三浦、草川両中佐はかの陸軍省にて軍務局長を刺した相沢中佐と氣脈を通ずる軍人中の過激分子であつて、たまたまそういう軍人が同志社に配属されていたというのであつて、これをもつて配属将校一班に擬することは間違つてゐる。

満州事變から支那事變と時局はますます緊迫し、戦争態勢に準備されていたのであるから、学内の教練がそういう組織中の重要な機関であつたことは自然の勢である。そういう中で配属将校たちはいずれも常識あり良識ある教師で学生の信頼を受けていた。学生がそういう将校たちに心服していたことは、あなたがちに教練の成績が一年志願の徴兵制度の特典につながるという功利主義的な考慮だけをもつて割り切りえない、徳望の由因のあつたことを否定し得ない。

そういう将校の一人に蔭山大佐があつた。蔭山大佐は軍人中には珍らしく酒を嗜まず喫煙せずという謹嚴なビュリタンであつた。そして真実なる敬神家であつた。あるとき福知山に宿宮演習が行われた。私も学生の部隊に同伴したのであるが、食事の時一同集まると

副官の松村大尉が立って、「豊受の大神」と呼ばわって食前の感謝の祈りを捧げた。神道のグレースなるものを筆者ははじめて聞いたのである。蔭山大佐は同志社在勤中病のため死去された。そしてその葬儀がチャペルで行われた。ただしそれは神道の葬儀で、あの壇上に祭壇が設けられ神官が断末魔のような声を発して降霊の儀を行った。第十六師団長が式辞を述べた。明治十八年チャペルが建てられてから今日までただ一度だけこの壇上で神道の祭典が行われた。それは蔭山大佐の葬儀であった。

ついでにチャペルの正面に日の丸の旗が掲げられていたことの由来を一言ここに記しておきたい。チャペルの正面に掲げてある新島先生の肖像油画の額を満州事変の頃から終戦まで東側の壁面に移して、正面には日の丸の旗を掲げてあった。それは先に記した三浦中佐の神棚事件に関連している。草川中佐が関係していたかどうかは知らないが、軍人たちの間にチャペルに神棚を設けさせようという企があったようである。中学長の野村仁作氏は予備海軍大佐でもあったので、そういう軍人による陰謀を嗅ぎつけ、先手を打って正面

にあの旭日旗を掲げてしまったのである。であるからあの旭日旗はいわば神棚除けでもあったのである。

大工原先生とデントン先生

昭和四年十一月九州帝国大学総長であった大工原銀太郎博士は迎えられて同志社総長に就任された。前総長の海老名先生の辞任に関連して不祥事があり、学内各部各校ともそれぞれに色々な問題があつて学園が多事多難である中に大工原先生は迎えられたのである。

大学予科において有終館問題のあつたことは前に述べたが、それにつづいて予科長の人事問題もあつた。これはしかし速水藤助氏が旧師であつた日野真澄氏にうやうやしく席を譲るという美しい態度に終始されたのでスムーズに事が運んだ。これよりさき予科で漢学の教授であつた下司氏が教室において脳溢血で倒れるという不幸のことがあつた。下司氏が死去されたので、その後任に速水氏は牧野伸氏を予科教授として迎えた。牧野氏を予科に迎えたことはやがて日野氏を同志社に再び迎えることの路線を敷くことになった。しかしながら学園全体としては多端であつた。

この間において大工原先生は同志社教育の大方針はクリスチャン・アトモスフィアを学園内にあまねく興くすことにあると唱え、卒先身をもつてこれに努められた。昭和九年春大工原先生は急性盲腸炎が悪化してついに府立医大病院において永眠された。その葬儀が同志社社葬として栄光館において行われた。葬儀のとき私はたまたまデントン先生の近くに居合わせた。デントン先生はいつものようにムツリとしておられたがただ一言“*He died for Doshisha*”と言われた。その面影がいまなお眼前に彷彿としてゐる。本年はデントン先生が逝かれてから二十年になつた。デントン先生が大工原先生について言われた“*He died for Doshisha*”という言葉はそのままデントン先生について（ただし“*He*”に“*S*”を加へて）“*She died for Doshisha*”と申したい。否デントン先生の場合は“*She had lived for Doshisha*”とべきであると思ふ。けだし七十年に余るデントン先生の同志社における生涯が *for Doshisha* であつたからである。

（校友・下関梅光女学院短大教授）